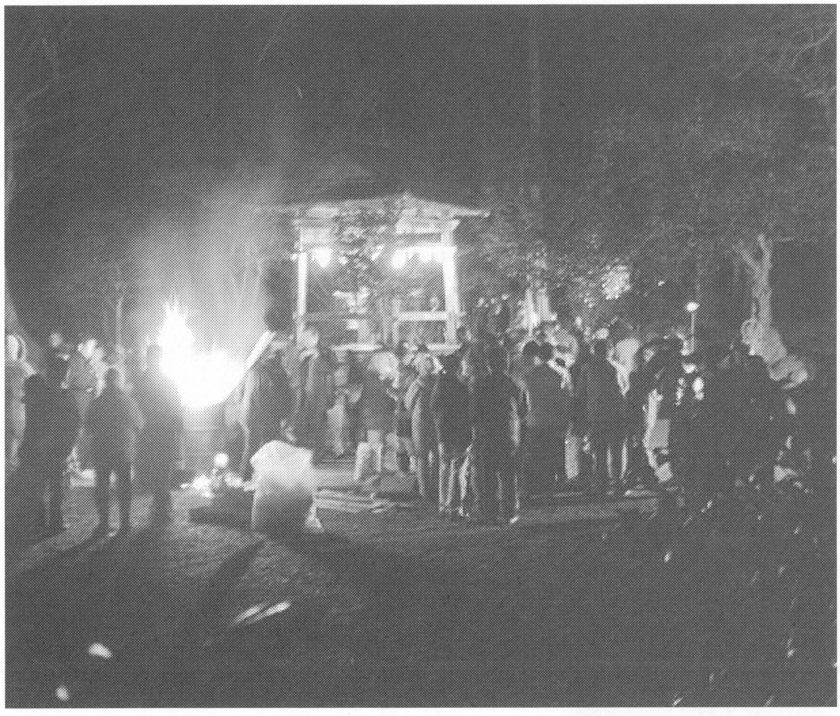


妙の光（たえのひかり）

通刊77号 **復刊56号**
2006年12月15日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟市角田浜1056
〒953-0011
TEL 0256－77－2025

除夜の鐘

大晦日の晩、各地のお寺で除夜の鐘を撞く。妙光寺では戦争で没収された鐘を、昭和五十一年に再鋳して以来ずっと皆さんに撞いてもらっている。当初、雪で誰も来られなかったらと心配したが、不思議と三十年間この日のこの時間帯だけはほぼ天気に恵まれた。

最近は二十代の若い男女や子供連れがめっきり増えて、鐘の音とお焚きあげの火のパチパチという音、これに負けない華やいだ声が境内に響く。

百八の煩悩の数というが、一人一回でもとても収まらない。撞いた順番を書いた記念品入の袋を渡して数を数えているが、一〇八番以降は全部一〇八番にしてある。

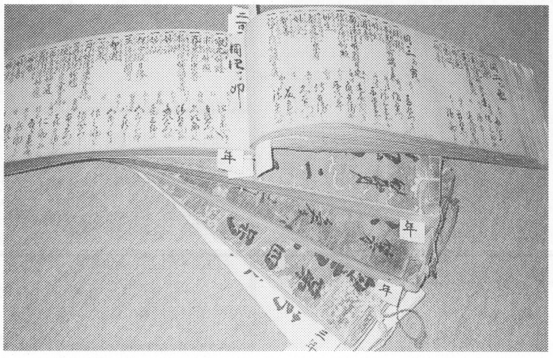
わが撞きてわが音として除夜の鐘　加倉井秋を
覚めて聞き聞きて眠りぬ除夜の鐘　相生垣瓜人

過去帳と年忌札

小川英爾

今年も暮れがやってきた。妙光寺の年末は檀信徒宅に伺い、来年のお守り札を一軒ごとに届けてお経を読む「お札配り」が忙しい。日が短いうえに天気が悪いと三時過ぎには暗くなり始めるし、ことに農家の仏間はどこも冷え冷えしていて、お経の後つい暖をとり温かいお茶をいただいて話し込むから日に十二～十三件しか回れない。

本堂を建替えた五年前からは、来年法事の当たるお宅に「婆ちゃんの七回忌」といったお知らせをする「年忌札」も直接届けている。故人の戒名と名前、それに命日と享年が記されていて、以前は本堂隣の祖師堂の長押（なげし）に年代の古い順から糊で貼り付けていた。それをお正月のお参りに来た方が、自分の家のぶんを剥ぎ取り、住職と法事の日取りを決める慣わしだった。新しい祖師堂にその場所がないことと、年内から手元にあれば来年の心積もりもできるだろうと考えて配ることにした。



この年忌札を書き出す元の台帳を「過去帳」といって、年代別に故人の戒名、命日等が記載されている。妙光寺ではこれが五冊に別れ、最も古い戒名の記録が三九五年前の慶長十六年、徳川家第二代将軍秀忠の時代となっている。しかし記録にあるだけでも二五〇年前の宝暦六年（一七五六）、二度目のに火災に遭っているので、この第一号帳がいつの時代に書き始められたものかはわからない。きちんと書かれていると思われるのが三〇〇年余り前の宝永一年くらいからで、犬公方で有名な徳川綱吉が死んだ年に当たる。赤穂四十七士が切腹したのも同じ年の二月のこと。これほど古くからの記録が残っているのだ。

ところが、来年が三〇〇回忌に当たる宝永五年には七人の戒名が記されているものの、その子孫が現存する家はそのなかでも一軒しかない。そのお宅では三百回忌の法事、なさるでしょうか。同様に二五〇回忌の宝暦八年には二十

四人の戒名があるなかで、子孫の現存するのが三軒で、二百回忌の文化五年も十九人中三軒しか残っていない。さすがに百回忌の明治四十一年は三十八人中二十八軒の子孫が現存されるが、五十回忌の昭和三十三年では二十二人中十四軒しか残っていない。残りの八軒、三十六％の子孫は家が絶えたか転居先不明になった。元々妙光寺周辺の海岸部は出稼ぎの多い地域で、そのまま関東や北海道に流出してしまったようだ。こうしてみると代々子孫が安泰というのもなかなか大変なことがわかる。

父である先代住職の時代までは、一枚一枚手書きで過去帳からこの年忌札に書き写していた。その数二〇〇枚あまり。この大変な作業を長岡市に住む父の兄で私の叔父が毎年の暮れ、ここに泊まり込みで何日もかかってやっていた。その叔父も父に遅れること四ヶ月で他界してしまい、父の後を継いだ私は最初から困った事態になった。思案の末、過去帳から直接コピーして、これを短冊形に切って年忌札にすることを思いつき現在に至っている。

それでも一軒ごとに振り分けるなかで、一枚一枚に私が三十一年間葬式を勤めたそのおひとりおひとりを思い起こす。故人の人柄、当時の家族模様、葬儀当日のエピソード等々。過去帳をめくってみてもひとりたりとも思い出せない人はいない。一年平均二十人として三十一年で六〇〇人を優に超す数だが、人の最期に立ち会うというのはそれほど重いことだと受け止めている。僧侶として故人を仏様の下に送り届けるという意味合いを持つ葬儀なればなおのことである。

過去帳に特徴的なことがひとつある。いまは戒名と同時に地域と個人の姓名を記入するが、古い時代には故人の名前は殆ど書かれていない。代わりに家の名前である屋号があり、妻、子、娘、倅、婆、爺という表示がされる。当主の場合はそれを意味する記号がつく。これは個人より家を単位にした考え方が主流だったからだ。そのために、先祖のルーツを調べて家系図を作りたいといって来られても、個人名が分からないからとても難しい。せめて誰それの妻とでもあればいいのだが、〇〇（屋号）の嫁、という記載では系図も年代と享年で推測するしかない。

明治四年に現在の戸籍制度ができる以前の江戸時代は、寺や庄屋が「宗門人別帳」という台帳で戸籍を管理していた。そこでも個人名がないのは多いらしい。もっともすべての人に苗字がつくようになったのも明治以降だから、屋号で識別するしかなかった。それにしても個人名を記載しなかったのはなぜだろう。

その一方で現代は屋号が通用しにくくなったり、屋号のないお宅が増えてきたことは別の意味で不便が生じている。個人名だけ、あるいは誰それの妻の何々というだけでは、同姓が多いからいずれどこのお宅かわからなくなってしまう。屋号があるから三〇〇年前の戒名でも全てのお宅かが分かるのだ。檀信徒宅に番号をつけて台帳で管理する、

なんて必要がでてくるかもしれない。この先はことに先祖代々が続きにくいから、そこまでいらないといわれそうな気もするが。

ただし檀信徒が県外も含めて増えている妙光寺では、家族の現在の様子が以前ほど見えにくくなってきている。そこでことに安穏廟でご縁を得た方には、現在の家族の様子を書いた病院のカルテのような記録をつけている。これを過去帳に対して「現在帳」と呼び、そこに相談ごとの記録を残したり、いただいた手紙を保管している。いずれ従来の檀信徒宅にも広げたいと思っているが、その整理にも世帯番号は必要かもしれない。

今の時代でそこまでプライバシーを知られたくないと言われることも承知している。必要以上に踏み込むつもりは毛頭ないが、寺と檀信徒はなるべく親密な関係でありたいと思う。仏様の元に個人を送るという意味の葬儀なればこそ必要だし、そうでなければ僧侶としての信頼すらいただいていないことになるのではないか。こうした信頼関係をこれからも作らせてくださいと、お願いします。

逆に言えば親戚関係とか人間関係がどんどん薄まる時代だからこそ、寺に一人一人の記録があることが自分の存在の証として考えられる、そんな妙光寺を目指したいと思っている。故人の記録は確かに行政の戸籍に×印をつけられて残る。でも妙光寺の現在帳には人生の一こまが、過去帳にはその人となりを込めた戒名が、縁ある寺に残ることに、なにか温もりのようなものを感じるのは私一人の思い入れに過ぎないのだろうか。

もちろん個人情報だから管理は万全を期しているし、過去帳もその内容を一般に見せてはならないとの指導がある。妙光寺にはないが、人を差別する用語が戒名に使われていたり、興信所の調査に利用されたりする例もあるとのことで。

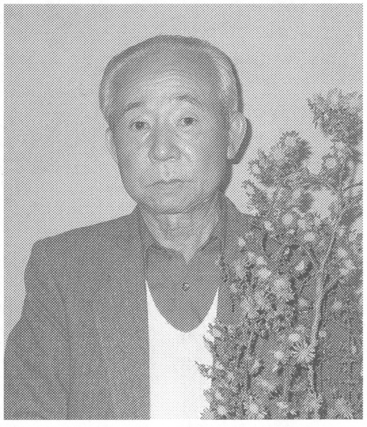
年の暮れになると、その年一年間に亡くなられた新しい戒名を過去帳に記載し、一周忌のご案内の準備をする。そのたびにこの一年を振り返りつつ、文字通りひとりひとりを偲び、そして残された家族に思いをはせる。そんなお付き合いを三十一年間続けてこれたことを、ありがたく思っている。ましてそれが三〇〇年以上の歴史がこもる、茶色に変色した五冊の過去帳になっているから歴史の重みを深く感じる。

妙光寺は正和二年、一三一三年に創立されたと記録があり、年が明けると二〇一三年の創立以来七〇〇年を迎える年まであと六年となる。

信心

菊花奉納十余年

新潟市葉萱場　内藤　清さん（七十六才）



ことしも秋の一ヶ月余り、玄関に見事な菊の花五鉢が展示されて、訪れる人の目を楽しませた。内藤さんが丹精こめて育てた花を展示するようになって、今年で十一年目を迎える。

新潟は弥彦神社の菊花展が有名で、菊作りの愛好家の数と技術は全国のトップクラスにある。内藤さんは定年退職後地元の「巻町菊花会」に入り、大菊作りから始めた。

仲間のひとりが菩提寺に花を飾るという話を聞き、自分も妙光寺にと思いついたのが始まりだった。当初は大菊をお寺の玄関に並べたが、次第により技術を要する小菊に心が移った。会を通して弥彦神社にも出品し、たびたび入賞する腕前になった。この間も妙光寺への奉納は欠かさず続け、ことに県外からの参拝者は「これが本当に菊の花ですか？」と、驚かれるほどだった。

小菊は盆栽のように小さな鉢にさまざまな形で立ち上げたり、岩や古木に根を張らせたりと、驚くほど繊細な咲かせ方をする。苗の植え付けが一年四ヶ月前から始まり、成長の早い夏場は一日たりとも目が離せない。手間がかかるのと場所をとるせいか、最近は若い人に敬遠されて愛好家がすっかり減り、昨年で内藤さんの会も解散してしまった。それでも自分の観賞用とお寺の分として、続けるという。

内藤さんには昔カメラの趣味があり、数年前にこれを再開した。今年四月お寺の「ご判さま」での水行の模様を収めた一枚**（写真左）**が、今年初めて新潟市美術展で入賞し、十一月に展示された。その作品も飾ってくださいと、菊の片付けの際に持ってこられた。

数年前夫婦で身延山への団体参拝に参加したが、とてもよかったのでぜひまた行きたいという。「記憶力がにぶったせいか、お経を覚えるのがおぼつかないのと、手が震えて筆が持てないのが悩みだ」と。

寺の動き

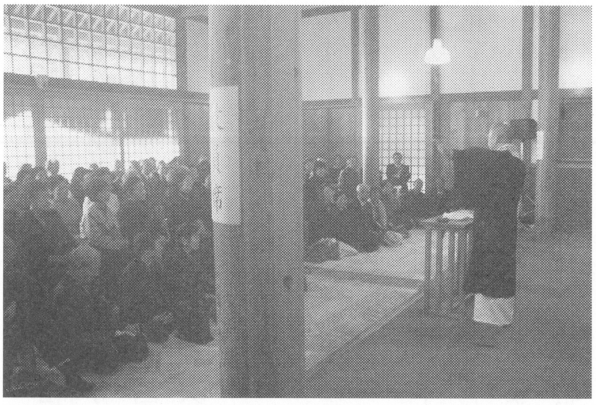
秋多彩

お会式・先代法要・授戒会

日蓮聖人滅後七二五年を偲ぶ「お会式（おえしき）」法要、先代住職の三十三回忌法要、そして五回目になった、生前に戒名を差し上げる「授戒会」を行いました。

十月二十九日、生憎の天気でしたが檀信徒、安穏会員、先代住職の親族で一三〇名余りが参列。ことに地元の檀信徒もさることながら、県内外の安穏会員も多く北海道、福島、千葉、東京、長野等々からおでかけいただきました。

授戒は十四人が受けられましたが今回は全員が安穏会員で、檀信徒の方々には「戒名は死んでから」という慣習が強いようです。後日受けられた方から「生涯忘れられない一日になりました」とのお手紙をいただきました。



好評の昼食後、ご期待の記念講演会。高橋卓志師（松本市・神宮寺住職）の抱腹絶倒、「落語よりずっとおもしろかった」というお話が九十分。あまりの盛り上がりに締めることができず、小川住職が入って二人でトークショー。これがまた会場からの質問も加えてさらに盛り上がって大盛会でした。

「いつもこんなに楽しいともっとお寺に人が集まるんじゃないの」とは、陰の声でした。

研修生の動向

十月二十日を以って三ヶ月間の住職候補生の事前研修が終了しました。その結果大野君がイラストレーターの仕事も捨てがたいとの理由で、妙光寺を離れました。もう一人の矢部君は、引き続き僧侶の道に進むとの決意を固めました。詳細な報告を別冊でお知らせしました。

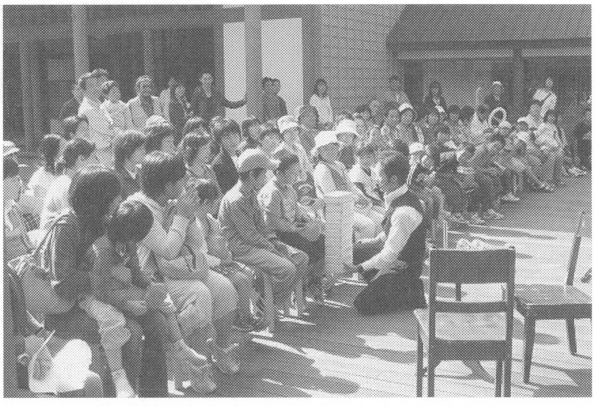
秋のイベント多彩に

新潟出身で現在滋賀県を拠点に活動する陶芸家、中野亘さんの個展を九月二十九日から十日間開催。前夜

祭の二十八日夜、太鼓で世界的に知られる「鼓童」の中心メンバーによるコンサートがあり、賑わいました。

笛の山口幹文さん、踊りの小島千恵子さん、さらに「鼓童」の若い太鼓のメンバーも飛び入り参加。この日のために南米ペルーから中野さんの友人の染色家が来日。持参したアルパカの毛織布をいっぱいに広げた院庭で、幽玄な音色とあでやかな踊りに魅了されました。観客の中に美術評論家の大倉宏さんがいられたり、また個展期間中に、京都を代表する文化人の一人といわれる法然院の梶田ご住職が、夜行バス日帰りで駆けつけたり、楽しい交流の場となりました。

十月十五日、「大道芸大会in角田浜」が六〇〇もの人を集めて賑わいました。「親子劇場」といって親子で音楽や演劇に親しむ全国組織があり、その巻親子劇場十五周年の記念行事です。



角田浜に三つの会場を設け、マジックショー、ジャグリング、影絵、人形芝居、コカリナ演奏、コンサート等々、十組余りのプロが自慢の芸を披露します。快晴に恵まれて妙光寺と他の会場も、たくさんの親子連れの楽しそうな声が夕方まで響きました。

代表の柿崎恭子さんが安穏会員というご縁でしたが、その企画力と準備運営は見事でした。夏のフェスティバル安穏で大好評だったパーティーの音楽も、柿崎さんのお力です。

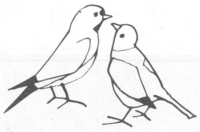
秋の花の彩り

秋から冬にかけての境内は、緑も色あせ花も少なく寂しい風情が漂います。そんななかで今年は初めての花が咲いて彩を添えてくれました。

春に植えていただいた「冬桜」の何本かが、早速に花をつけたのです。秋に葉が散った後から冬、そして翌年の春まで花をつけるそうです。寒風の中に咲く小さくて可憐な花の姿は愛おし

く、可愛そうなくらいです。早く木が大きくなってたくさんの花をつけてくれることを心待ちにしたいと思います。

その根元の周辺に「シュウメイギク」が、これまた初めて見事に咲きました。京都の貴船神社の境内に多く咲いていることから「貴船草」ともいうそうです。昨年亡くなられた神奈川県の杉山さんの好きな花のひとつで、自宅の庭に沢山植えてあり、ご遺族から株分けして送っていただきました。



白と薄いピンクのやや大きめの花が次々と咲くので、割りに長い期間楽しめました。自然に増えていくそうで、やがて広がって咲いたらみごとでしょう。

中庭でいい香りがすると思ったら、「銀木犀」が葉の裏にびっしりと花をつけていました。毎年ここまで多くの花はつけていないと記憶しているので、何年振りかの大量咲きではないでしょうか。秋の日差しの中で、独特の香りにとてもいい気持ちになりました。

義援金中間報告

八月十二日、落雷で全焼した聖籠町・大宝寺への復興義援金を前号でお願いしました。十二月十日現在で九十四件二一万一千円お寄せいただいてます。一口千円、相変わらず厳しい経済状況ですが、締め切りの十二月末日まで、なにとぞご協力お願いします。

ミニ修行体験のご案内

お経を覚えて一緒に唱えたい。お寺で修行を体験したい。仏教や日蓮宗のことについて少しは知りたい。住職の話がゆっくり聞きたい。こんな方のためのミニ修行体験道場を開いています。

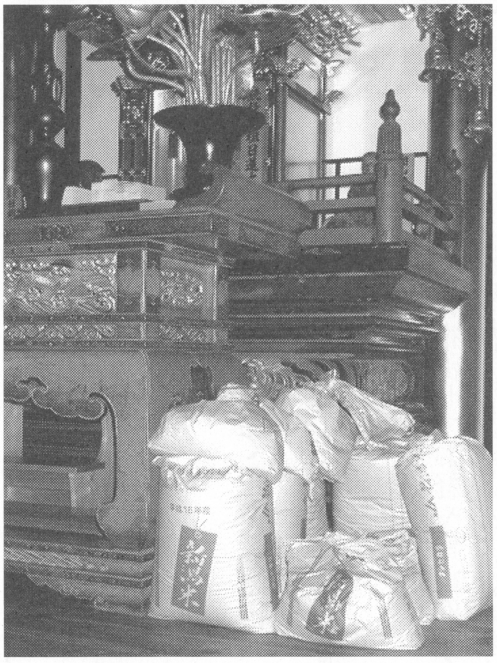
日常生活に役立つ作法、その意味、考え方等々の説明もあり、難しいものではありません。また「もっと厳しいかと思った」と言われるくらい、厳しくしていません。お一人でもご夫婦でも大丈夫。ご高齢、体が少し不自由という方には配慮します。

おかげさまで大変好評でして、これま

で入門コース三回、その上のコース一回開催しましたが、都合三回参加の方もあります。今回は初めての入門コースと、二、三、四回目の方合同の初級コースの二回を計画しました。ぜひご参加ください。詳しくは10ページのご案内で。

秋奉加

檀信徒の農家を中心に秋の収穫である新米を仏前に奉納していただく秋奉加、今年もご協力ありがとうございました。農家が減って減少傾向にありますが、大変ありがたい古くからの習慣です。引き続きご協力をお願いします。



祖師堂にお供えした秋奉加

ホームページの作り直し

コンピューター上で企業や自治体、学校等を紹介する窓口をホームページといい、いまや世界中で使われています。妙光寺のホームページは一昨年の四月に開設しましたが、幸い好評で、妙光寺と調べると（検索といいます）全国数ある妙光寺のなかでトップで出てきます。検索される数が一番多いということです。

三ヶ月ごとに更新といって内容を変えているのですが、二年半経過して形式がやや古くなったせいもあり、これがなかなか進みません。そこで大幅な作り直しを準備中です。いつもご覧いただいている方には、いま少しお待ち願います。

年会費お忘れでありませんか

八月のお盆までにお願いしている年会費ですが、いまだ未納の方がおいでです。今回一緒にご案内しましたので、お忘れの方はよろしくお願いします。

参籠修行のご案内

第四回「一泊二日初めての参籠修行」

参籠（さんろう）とはお寺に修行の目的で宿泊することをいいます。

趣　旨・妙光寺に宿泊してお経や作法の基本を経験し、住職や参加者同士が語り合い交流をはかります。さらに写経を体験し、国登録有形文化財の三重塔に納経します。

期　日・来年四月七・八日（土、日）

対　象・妙光寺の檀信徒、安穏会員、その同伴者ならどなたでも。

定　員・十五名

費　用・一人一万円（一泊三食、写経用品を含む。料理にご馳走が過ぎるとの感想で、経費を減額しました）

日　程・一日目　午後一時半集合　講義
お経と作法の実習　他
二日目　朝のお勤め　写経　まとめの練習
法話　納経法要
昼食後解散　希望者には午後個別相談

＊詳細は参加者に直接ご案内します

第二回　初級参籠修行

「初めての参籠修行」を終えた方の、二回目以降の方が対象です。期日以外は同じですが、内容がちょっと上の段階に進みます。繰り返して身につけていただくためにも、また懐かしい再開にも、ご参加ください

期　日・来年三月二十四・二十五日（土、日）

前寺建設計画

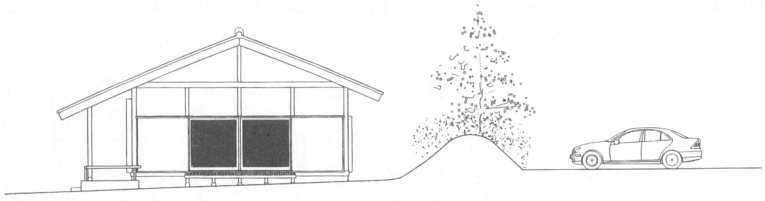
歴史があってやや大きなお寺には、塔頭（たっちゅう）と呼ぶ付属のお寺が境内の中にあることがあります。妙光寺にも通称前寺と呼ばれた京住院というお寺があり、寺家（じけ）さまと親しまれた住職が常駐していました。

しかしこの方が老齢で引退された後、建物が老朽化したので二十年ほど前に解体しました。歴史的には寛文五年（一六六五）十月二十三日に亡くなられた、妙光寺第二十三代目（現在は五十三代目）の京住院日通上人が、妙光寺を引退しその隠居所として最初に建てたとの記録があります。

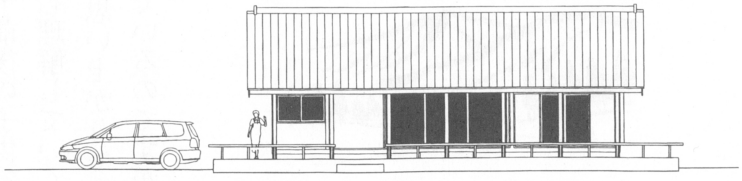
この前寺を復興して、さらに前の本堂のご本尊の仏像一式が保管されたままになっているのでしょうから、ここに安置してはいかがでしょうか、との申し出でと、その経費全額分を、埼玉県のAさんから奉納いただきました。

しかし現段階では前寺として復興しても、常駐する見通しはありません。そこで、近年増加している妙光寺での葬儀の宿泊施設を兼ねる案をお話したところ、Aさんに大変喜んでいただきました。病院から直接遺体を搬送し、親族が自由に宿泊でき、小規模ならここで葬儀もできます。

「それなら最初に私の生前葬をそこでお願いしたい」とのAさんのご希望もあり、来年夏か遅くとも秋の完成を目指します。ところが広い境内ですが、建築上の規制等々で、位置の選定に手間取っています。次号でさらに詳しいお知らせができるよう鋭意進めたいと思います。



東面立面図



南面立面図

傾向の変化

「宗教とは無縁と思っていた私が安穏廟と出会ってから、その考えが少々変わってきたような気がする。墓は死後のものだと思っていたが、生前に私たちの思いを墓碑に刻み、しかも自然に恵まれた環境のもとに幾度となく訪れ、そして本堂に礼拝することで、私は人生への達成感、安心感、自己の証を肌で感じることができるのである。これも妙光寺（宗教）とのご縁の賜物と感謝している」

以前皆さんに戴いたアンケートの回答で、住職冥利に尽きる一文でした。こうした方は少なからずおられると自負してきましたが、最近は初めて相談にこられる方の傾向が変わってきているようで気になっています。

「宗教色なしでお葬式をしたので今後もそうしたことは一切要りません。」「葬式は葬儀社で紹介されたお寺にお願いしました。今後の法事もそのたびに葬儀社に相談することになっています。檀家になって何かと寄付とか縛られるのが嫌ですから。安穏廟はそのてん自由でいいのですよね？」という方が多いのです。

多くは深く考えてのことではなく、寺とか宗教はお金がかかり、何かと強要されることがある面倒な世界という、近頃の世間一般の情報を鵜呑みにしているようです。そんな方に「妙光寺では……」と、問われないのに説明することもできないし、なによりも以前と違って、はなから寺（宗教）に対して拒絶感があります。どうしても先々に行っても気持ちが通いそうもない方には、やんわりとお断りすることもあります。

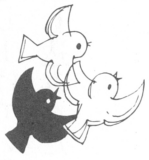
お寺にも反省点が多いので、間口を広げて幅広く受け入れようと始めたのが安穏廟です。でもなんだかそこに土足で入って来られる感じがしてしまうのです。最低限仏様への敬意の気持ち、そして自分のことだけでなく従来の檀信徒、会員の皆さんに対しての配慮もあって欲しいのです。

ただこうした傾向は失礼ながら中高年の方に多く、逆に若い世代には極端な思い込みがないことにホッとさせられます。同行してくる三十前後の子供でもいると、どんどん質問し理解していくのです。だから妙光寺の思い上がりでなく、社会の風潮だと思っているのですが如何なものでしょう。

寺庭から

子育て終了！

小川　なぎさ



この十一月めでたく末の双子の娘たちが二十歳の誕生日を迎えました。これで全員大人にした!! と感慨深く思ったのは誕生日はもちろんですが、最近はあまり私に頼る電話がこなくなったということがあります。それだけ学生生活に慣れて忙しくしているのでしょう。冗談で寂しいよと言うこともありますが、あと数年無事卒業して自立してくれるその日を心待ちにしています。

母親として本当に幸せな環境で子育てを終えることができたことを感謝申し上げます。子どものためにと遠方の珍しい贈り物を送って下さったり、皆さんのお家によせてもらって優しくしていただいたこと。ご近所の方が届けてくださった野菜や果物、魚などの新鮮な食べ物が、彼女らを健康で好き嫌いのない大人に育ててくれたと思っています。

最後まで私に面倒を見させていた長女も卒業後は新潟を離れることが決まりました。お世話になりました。家ではないので、みんな自分の私物は綺麗に始末していくつかのダンボール箱を残しての出発です。帰省してもう自分の部屋は無い事はかわいそうな気もしましたが、でも今はそれくらい潔いほうがお寺育ちらしくて良いと思っています。子どもはいなくなっても、今年は矢部君という素直で優しい若者を迎え、来年は総勢五人、新しい妙光寺の出発！という気持ちでいます。

私はこの一年、それは悲しいことや辛いことも沢山ありましたが、それにも増して嬉しいこともありました。女性同士でしかたぶん分かり合えないお話をたくさんしました。優しいお手紙もいただきました。愛犬友達（私が勝手に思っている）もできました。自分に何かあったら犬を頼みます、といいながら境内でご自分の愛犬とウチのもんたを遊ばせて下さいました。冗談でもなんだかうれしかった。

来年もお寺が色々な行事を通してみんなが集い、出会いの中で心温まる優しい交流が生まれますように。私のようにそれが元気の素や糧になるとうれしいです。

雨ばかりの寒い日が続いていますが、穏やかな年の暮れを祈りつつ。除夜には銀杏は不作でしたが、こんにゃくや甘酒を用意します。お出かけください。

来年もよろしくお願いいたします。

行事案内

お札配り　十二月に入って住職と鎌田が手分けして、県内の檀信徒宅にお経に伺っています。予定を事前に通知するのが難しいので、お電話いただければご都合に合わせます。

大晦日　大晦日夜十時半から本堂で除夜法要。引き続き十一時四十分ころから除夜の鐘を撞きます。どなたでも先着順に番号の書いた袋を受け取り、それから撞いてもらいます。例年の銀杏が昨年豊作過ぎて今年は不作なため、袋には代わりの品が入ります。撞いた後で縁起物の熊手等が当たるくじ引きもあります。ご家族お揃いでお出かけください。古いお札や仏具のお焚き上げもあります。

元旦・年始参り　元旦と二日の朝九時から午後四時まで、ご年始の受付をしています。新しい年の始まりは本堂へのお参りから始めましょう。この時間帯住職がお待ちしています。どなたも気軽にお出かけください。

星祭祈願　一年間の家内安全、健康、幸運を祈願する「星祭」は一軒二千円です。元旦の法要で祈願の上、家族ごとに全員の星を記入したお札を差し上げています。新規希望者のみ家族全員の氏名、性別、生年月日を書いてお申し込みください。

ときめき

前号で次回に嬉しいお知らせをとお伝えしたのは、前寺建設計画のことで、完成すれば妙光寺を使っての葬儀が格段に都合よくなります。ところが敷地の問題で調整に手間取っています。田舎ゆえ昔から敷地境界とか地目とかを曖昧にしてきたことが原因です。何かをするときには表に出てこない苦労があるのは再三経験してきたことですが、少々疲れ気味。後世のためにもきちんとするつもりですが。よいお年をお迎えください。

小川